

などで飼育する。子牛の肥育期間は、一般的な和牛の約28カ月よりも半年以上長い約35～36カ月。最短でも初出荷は3年後になる見込み。

宮崎県川南町では、竹の谷蔓牛と交配させた和牛を「いぶさな牛」のブランド名で生産しており、高橋さんも独自ブランド牛の開発を模索。ブランド化のあかつきには「十勝白人（ちろっと）牛」と名付ける予定だ。

高橋さんは「蔓牛の血を引いた牛を地域で生産し、加工や販売まで行う6次産業化につなげたい。この牛を食べるために幕別を訪れるような形にして、地域活性化の一翼を担えたら」と話している。



道内初上陸の「竹の谷蔓牛」と高橋代表



試食した「竹の谷蔓牛」は赤身たっぷりの肉質を誇る

帯畜大の工藤さん最優秀 牛の遺伝病解明に光 家畜臨床学会 坂口さんは優秀発表賞

2019年1月6日

帯広畜産大学共同獣医学課程6年の工藤彩佳さん（25）が、日本家畜臨床学会学術集会（昨年11月・仙台市）で最優秀発表賞に輝いた。乳牛の遺伝病発症メカニズム解明に役立つ研究が評価された。同6年の坂口加奈さん（24）も優秀発表賞を受賞した。春から道内で獣医師となる2人は、農業発展の一翼を担う決意を新たにしている。



学会賞を受賞した（左から）工藤さんと坂口さん。
右端は猪熊教授

工藤さんは、ホルスタイン種の新しい遺伝病「牛コレステロール代謝異常症」について研究。2015年に報告された病気で、発症すると1歳まで生きられず、十勝でも問題となっている。

常染色体劣性遺伝疾患で、異常遺伝子を両親双方から受け継いだホモ個体のみが発症するとされている。これに疑問を持った工藤さんは、正常と異常遺伝子の双方を受け継いだヘテロ個体を調査。ヘテロ個体でもまれに発症し、発症しなくても、コレステロールが低く乳量が少なくなる牛がいることを突き止めた。

ホモ個体の誕生を防ぐため、日本では17年、異常遺伝子を持つ雄牛の精液提供を禁止した。だが、ヘテロ個体でも発症するとした研究成果は、この対策を見直し、乳牛改良戦略に影響を与える可能性がある。工藤さんは「獣医師として謙虚に牛と向き合い、これまでの経験を生かして農家の力になりたい」と話す。

坂口さんは、牛白血病ウイルス感染に関する研究を発表した。牛白血病は主にウイルス感染で発症し、細胞が腫瘍化して廃棄処分される。感染牛の7割は症状が出ず、残りの3割は持続性リンパ球増多症（PL）状態になる。PLは臨床的には正常とされている。

PLが正常との考えを疑った坂口さんは、牛のDNAに組み込まれるウイルスに着目。ウイルスは通常ランダムな位置に組み込まれるが、腫瘍を発症すると同じ位置に組み込まれて増殖する。一部のPL牛は発症した牛と同じパターンを示し、既に腫瘍化している可能性が分かった。

感染防止につながる研究成果を示した坂口さんは「現場でも疑問を大切に、一緒に仕事をしたいと思われる獣医師を目指したい」と話す。

2人を指導する猪熊壽教授（57）は「獣医師になっても、研究マインドを持ち続けてほしい」とエールを送っている。